

# 一九九九年大学入試の現実

## 京阪神地域を検証する



柳田洋一郎

大阪私大教連・梅花学園教職員組合

### □ 定員割れの状況

大学・短大の危機は地方の短大からはじまり、大都市圏・首都圏へと追っていくと予測された。京阪神の短大では九八年度から定員割れがめだちははじめた。そして九九年度の入試では、半数以上の短大が定員を割ったようである。大阪府下を例にとると、私立短大三十八校のうち九八年度に入学者数が定員を割ったのは十二校だった。九九年度になると、推薦・一般を合わせた合格者数が定員を上回ったのはわずか十四校に過ぎない。しかも一般入試の志願者数が公募推薦を上回るのは五校のみである。推薦依存は競争

力低下を示す。不足分は併設校を含む指定校からの推薦で補われるが、各高校では募集数が希望者を上回る状況であり、応募数は年々減少している。こうした条件を勘案すると三分の二近くが定員割れの可能性があった。

短大の減少はかなり急激である。しかも、減少傾向は女子大にまで広がっている。『蛍雪時代』（八月臨時増刊）掲載の女子大の入学者数にもとづいてみると、神戸山手女子（定員充足率〇・九九、以下同じ）、帝塚山学院（〇・九九）、大谷女子（〇・九八）、大手前女子（〇・九六）、大阪国際女子（〇・九二）、神戸海星女子（〇・九二）、梅花女子（〇・八九）、園田学園女子（〇・四五）の各校が定員を割り込

んでいる。いわば、昨年の短大と同様の初期症状であり、来年度はこうした傾向が中位レベルの共学を中心とした大学に拡大する可能性が高い。

## □ 危機への疑問

定員割れ状況を目前にして、急減期対策が急務となった。それぞれの大学・短大で、学部・学科の新設や名称変更、不振学科の定員減、共学化などが行われている。単立の短大では四大化が行われ、四大を併設する短大では縮小・廃止もみられる。

しかし、大学の沿革と改組転換の状況をみてみると、共学化・四大化は必ずしも急減期対策ではないことに気づかされる。高校や専門学校をもとに短大を設立し、さらに大学を立ち上げるといったのが一般的な私学の発展・拡大の形態だった。社会の高学歴化と郊外開発の流れに乗って、そうした拡大策は推進されてきた。その傾向が最近のサバイバルのためにいっそう加速されたにすぎないのである。こ

やなぎだ・よういちろう●一九五二年、大阪府生まれ●主な著書、論文に『秋山郷の民俗』（共著、初芝文庫、一九九七年）、『平家物語』の童帝（『軍記物語の窓 第一集』関西軍記物語研究会編、和泉書院、一九九七年）

れは危機対応ではない。リスクをともなっているが、危機を克服する方策として行われているのではない。

京阪神地区で概観しておこう。まず大阪である。四天王寺国際教大は天王寺区にあった女子短大を母体に八一年に羽曳野市に共学校として新設、短大も学部化した。外人居留地に創立され生野区に移ったプール学院は、九六年に堺市の泉北ニュータウンに移転し共学四大化している。八〇年代以降をみると、市内から大阪南部への移転がめだっている。すでに大谷女子大が富田林市に、帝塚山学院が大阪狭山市に移転していた。

京都では、上京区にあった成安短大は長岡京市に移転、さらに九三年に大津市仰木の新興住宅地に共学四大を立ち上げ短大も共学化した。同じく上京区の平安女学院は高槻市南平台の住宅地に移転、さらに二〇〇〇年に滋賀県守山市に四大を新設する。

兵庫では、女子神学校にはじまる西宮市の聖和大が八〇年に共学化。灘区の神戸女子薬科大は九四年に改称して共学化。女子短大を母体とする加古川市の兵庫大も九五年共学化している。八七年三木市に開学した関西女学院短大は九八年に共学の関西国際大を新設し短大を学部化した。

最近の動向をみると、実務系の大阪短大（美原町）が九

八年に南大阪大学となる。九九年には女子師範同窓会の創立による常磐会（平野区）が共学四大化している。二〇〇〇年には福知山市の京都短大は京都創成大になる。関西空港近くにある大阪明浄（熊取町）は観光学部を新設する。大手前女子大（西宮市）は校名から女子を外して共学化する。バブル期に鳴り物入りで新装され経営破綻に至った姫路学院短大（福崎町）は廃止され、新たに近畿福祉大が立ち上がる。さらに二〇〇一年以降には、大阪薫英（摂津市）、大阪成蹊（東淀川区）、羽衣学園（堺市）などの共学化を含む四大化構想が続いている。

### Ⅲ 競争の勝者

短大・女子大は、依然として成長過程にある。短大学生の多くは女子であり、女子大とともに戦後社会に残っていた性差別のなかで女子の高等教育・職業教育を保障してきた。しかし、私学経営はその役割に甘んじてきたわけではない。短大から女子大へ、そして共学へ。その成長は当然ながら学生数の増大をともなっていた。進学率の上昇は確実な追い風となった。そして、成長神話においては、十八才人口減すら成功の契機となった。逆境は競争を激化させるからである。

競争を語るうえで、勝者を挙げておくのが分かりやすい。

京阪神の女子大では、武庫川女子大の前期入試志願者が前年比一一・五％という驚異的な増加を示した。志願者九千四百三十五人で五千三十六人の増加である。ほどよい難易度、幅広い学科構成、通学の利便性が人気のポイントとされている。武庫川は短大でも強かった。女子大と短大の学科構成が重なるにもかかわらず、双方とも爆発的な志願者を集めた。学科が重なりと内部での食い合いになることが多い。そうした他校を尻目に、武庫川は女子大全体のパイと短大全体のパイをそれぞれ大食いした。需要が縮小するなかで一人勝ちしたのである。短大志願者上位は、武庫川短大部六千五百八十八人、関西外短大部五千三百八十五人、京女四千五百七十二人。データの出ている京阪神短大の志願者総数に対して実に三二％をこの三校で占めている（定員比一七％）。

### Ⅳ 女子大ランキング

九九年度入試の京阪神女子大の状況を概観してみよう。「志／定」は推薦・一般の志願者数を定員で割ったもの、「増減率」は二月入試での前年比、「新入生」は新入生総数を定員で割ったもので、定員充足率を示す。（データは、

大阪予備校・大阪北予備校、代々木ゼミナール、旺文社によった)

上位八校のうち京女・同女・京都橘・神戸女子・神戸女学院の五校は、志願者を減らしながらも定員比三倍以上はキープしている。また、昨年より志願者を増やした武庫川・大阪樟蔭・甲南女の三校は知名度と入りやすさが追い風になった。「共学志向による女子大から有名共学への流れ」と「四大志向による短大からの流れ」が錯綜している。

九位の神戸松蔭以下は志願者減が大きい。志願者が「共学校」へ流れ、「短大からの流れ」も吸収できなかつた。とくに、神戸松蔭・光華・梅花・大谷女子の減少めだつ。定員に対する志願者数は三倍を下回ると苦しい。

### 五 ひしめく神戸

女子大二十校のうち半数の十校が尼崎・西宮・神戸にある。鈴蘭台にある神戸親和を除くと尼崎の園田から須磨の神戸女子大まで九校がほぼ一直線に並んでいる。甲南女子の近くにはJ.R甲南山手駅が新設された。阪神大震災では神戸女学院や大手前が被害を受けたが速やかな復興でリニューアルしている。大ブレイクした武庫川は西宮市の東端にあり大阪からの通学者も多い。しかし、立地だけではな

	所在地	志/定	増減率	新入生	
1	京都女子	京・東山	9.1	-13	公表せず
2	武庫川女子	西宮	8.71	115	1.07
3	同志社女子	京田辺	6.34	-27	1.06
4	京都橘女子	京・山科	5.55	-19.3	公表せず
5	神戸女子	神・須磨	4.57	-12	1.13
6	大阪樟蔭女子	東大阪	4.1	24.8	1.3
7	神戸女学院	西宮	3.45	-9.6	1.25
8	甲南女子	神・東灘	3.67	0.1	1.24
9	神戸松蔭女子	神・灘	3.08	-42	1.02
10	光華女子	京・右京	2.88	-40	1.1
11	神戸親和女子	神・北	2.58	-27	1.26
12	神戸山手	神・中央	2.08	-	0.99
13	帝塚山学院	大阪狭山	2.07	5.1	0.99
14	神戸海星女子	神・灘	2.06	-25	0.91
15	ノートルダム	京・左京	2.03	-10	1.12
16	梅花女子	茨木	1.88	-46	0.89
17	大手前	西宮	1.61	-	0.96
18	大阪国際女子	守口	1.42	-	0.92
19	大谷女子	富田林	1.04	41.7	0.98
20	園田女子	尼崎	0.69	-	0.45

い。武庫川より大阪に近い園田学園女子は大きく減らしている。一般入試の志願者が公募推薦を下回り、しかも志願

2000年共学化

者総数が定員に達していない。内部進学や指定校推薦などで埋められない状況だった。

園田は九六年に国際文化学部を新設した。文化学科と言語コミュニケーション学科。文化学科は「日本の文学と芸能専攻・日本の歴史と民俗専攻・比較生活文化専攻」、言語コミュニケーション学科は「日本語専攻・英語専攻・情報コミュニケーション専攻」で構成されている。内容をみると人文系の組み替えの域を出ていないが、既存の人材をベースにした改組ではやむをえない。硬式テニスでは全国的に名を知られている。情報教育にも力を注いでいる。にもかかわらず、激減であった。

阪神間では、大手前も苦戦している。大阪の専門学校を母体にしており、女子大は六六年に西宮市に開学、短大も八六年に伊丹市に移転している。神戸の女子大では地元での歴史がもつとも浅い。今年から文学部を人文科学部に改組し、二〇〇〇年には大手前大学に改称し共学化する。また、短大の秘書科を廃止し、社会文化学部（人間環境学科・社会情報学科）を新設する。現在、沿線私鉄の全面吊り広告で男女共学をPRしている。

神戸山手大は短大を母体に今年新設されたばかりである。こちらは女子のみで、人文学部環境文化学科である。

開学初年でほぼ定員を満たしたとみるべきか、下位低迷が続く前兆とみるか、予断を許さない。

#### 〔六〕 京阪神の違い

神戸の競争は武庫川の独り勝ちであった。ただし、八・七倍の志願者を集めても入学者は定員に縛られるのだから、近隣女子大には武庫川の志願者呼び込み利点もある。大規模店と商店街の共存にみられる効果が生まれれば、独り勝ちとは他校の敗北ではないことになる。

一方、京都では京女・同女が上位を占め、歴史・文化財と女性学に特色を出した京都橋が続いている。京都橋は急増期に校名に「京都」を冠して山科区にありながら幅広い志願者を集めた実績がある。京都市地下鉄の開通によりバス系統が全廃されかえってアクセスが悪くなった。しかし、京都の大学間連携を活用して知名度を上げている。ノートルダム女子大も京都ノートルダム女子大に改称する。文学部（英語英文・生活文化）を人間文化学部に変更、生活文化を廃止、英語英文の定員を半減して、人間文化学科・生活福祉文化学科・生涯発達心理学科を新設する。

京都・神戸の女子大がそれぞれの都市型の立地を生かしているのに対して、大阪の女子大は郊外分散的で孤立した

努力を強いられている。私鉄沿線で見ると阪急京都線に梅花、京阪線に大阪国際女子、近鉄奈良線に大阪樟蔭、南海高野線に帝塚山学院、高野線に河内長野で接合する近鉄長野線に大谷女子。地域でみるか、短大を含めて女子系でみるか、学科・偏差値でみるか。女子大五校をまとめても統計的な意味しかないのが、大阪の特色である。

## ㊦ 女子大からみた大阪

大阪北部は神戸へも京都へもアクセスできる。関関同立に数えられる関西大だが同・立と関学の動きをにらみながら動いているといわれる。共学では追手門大、大阪経済、大阪学院がある。女子大は梅花だけが、大規模短大も多い。金蘭(千七百人)、大阪成蹊(千四百八十人)、大阪青山(共学九百人)、大阪学院大短大部(共学八百人)などがある。こうした背景を考慮して、梅花女子の減少は女子大の先端的な指標にはなる。入試志願者が激減し、入試の志願者数が推薦に近づいており、総志願者数が定員の二倍を切っている。ほぼ全員合格の状態である。しかも定員の一〇%以上を割り込んだ。梅花は九七年に比較文化・人間福祉を新設したが、比較文化は英米文と食い合いになっている。来年は人間科学を新設するものの、類似の新学科が

あちこちで設置されているから受験生への浸透がカギになる。

大阪国際女子は、京阪線沿いに短大・女子大・共学の大阪国際大を展開していった。沿線には摂南大や関西外語大、並行するJＲ学研都市線には大阪産大があり、京都に入ると同志社女子がある。上位校・共学校のなかで苦戦を強いられている。学研都市線はそのまま東西線を經由して阪神間に接続するようになったため、地元受験生の流出の誘因にもなっている。

大阪樟蔭女子は在阪女子大のなかでは優位を占めている。学芸学部は国文・英米文・食物・被服・児童という従来の構成のまま。香芝市にある樟蔭女子短大(日本文化史・日本文学・英米語・人間関係、五百七十人)の不振学科を整理して女子大に吸収するといわれ、改組の可能性もある。

大阪南部では堺市の泉北ニュータウンから東側に続く南河内地区にキャンパスが散在している。定員に対する志願者の順に並べると、関西福祉科学大(二四・八)、桃山大(九・七八)、四天王寺国際仏教大(九・二)、大阪芸大(六・四三)、南大阪大(三・八七)、プール学院(二・二)。関西福科・南大阪・プールは短大から四大を立ち上げた。福祉人気

を受けたかどうかで明暗を分けている。帝塚山学院は住吉区の高級住宅地から移転した。九八年に短大を廃止し、人間文化学部を新設した。事態打開には至っていない。大谷女子も阿倍野区から移転した。来年ようやく文学部（国文・英文・幼児教育）に新学科を設ける。新設・改組転換が正しいわけではないが、変化に対応できているかどうか疑問がある。

## Ⅷ 今後の展開

経営優先の大学間競争がどうなるか。金融再編における破綻・廃業・合併といったメガ・コンペティションのみじめな結果を見ているだけに、大学の体力・実力を考えると危険度は高い。短大の再編が、人文系の縮小、資格・実学系の重視という方向へ進んでいくと、専門学校との競合というより、短大の専門学校化へと傾斜していくだろう。たとえば京阪神地区にある定員二百人未満の短大が美容系の学科を新設する。同系統では東京八王子に山野美容芸術短大（九二年開学）があるだけの稀少学科。有名な講師陣を確保したというから既存の専門学校にとつても驚異である。こうした流れが多方面に拡大していくと、高卒・専門学校というラインが崩れ、高学歴化はいつそう促進される。

同時に、人文・家政など教養系は四大化ないし統合・縮小の波にのみこまれていくだろう。

女子大再編の経営的トレンドは、女子教育の柱となっていた文学・家政・教育からいかにスマートに脱却するかにかかっている。武庫川女子の人気学科のひとつに文学部「人間関係」学科があった。心理学・ボランティア実習などをやくから採り入れていた。来春、この学科は定員を増やして「人間」学科に生まれ変わる。人間関係学科は甲南女子・光華女子にもある。文学部内部での社会科学志向を表していた。ひとつのエポックは家政短大を改組して九六年に新設された京都文教大の人間学部である。文化人類学と臨床心理学を、高名な学者をコーディネイターとして立ち上げた。九九年の定員に対する志願者数は一二・八倍に達する。文教の場合は、女子系からの脱皮を「人間」というコンセプトで表したが、女子大ではマイナーイメージをカバーする効果も期待された。大阪国際女子、神戸女学院は「人間科学部」を設置しており、梅花は二〇〇〇年に人間科学科を新設する。「人間文化学部」は九八年帝塚山学院に開設され、二〇〇〇年にはノートルダムが新設する。

むろん、この傾向は女子大に限らず四大中位校の傾向でもあった（天理・追手門は人間学部、甲子園・京都学園は

人間文化学部)。また、文学部から「人文」学部への改称も多い。相愛（八四年）、京都精華（八九年）、神戸学院（九〇年）、聖和（九五年）、神戸山手（九九年）のほか、帝塚山は人文科学部（九九年）を称している。既存の文学部ないしは統合・改組した短大や教養の資源をもとに、心理学・社会学や環境・福祉・情報といった今日的な要素を加えて再編成するとき、包括的な名称として採用されたのが「人間」「人文」だった。そのため、総合性とともにもボーダーレスの性格を強く持っている。悪くいえば、何を学ぶのが学部・学科名では分からないのである。

女子大であることを積極的にアピールして成功している女子大はない。建学理念や歴史的理由で女子を維持しつつ、

学部・学科はボーダーレス化が促進されている。経営が理念に優先すれば、共学化は止められない。京都・大阪では女子大の併設校を含めて女子高の共学化が進んでいるのである。同時に、文学部離れは加速されている。既存の資源を活用したりニューアルに限界がみえはじめると、新規領域への開拓がはじまる。同女・京女が新設する「現代社会」学部は、伝統的な女子大の資源にはほとんど依存していない。ゲシュタルト心理学にたとえれば、「人間」は「図」であり「現代社会」は「地」である。ボーダーレス化した「人間」を反転させると「現代社会」になる。エッセイ的「だまし絵」の世界とでもいおうか。もはや、女子大は「女子大ではない」ことを標榜し始めている。